

長野県大町市における昆虫食文化の「希薄化」

浅子湧土・加藤悠太郎・澤木雅也・曹 祉劼
孫 浩・市川竣介・高見澤真道

本稿では、長野県大町市を対象として、昆虫の採集行動やその文化の継承に着目し、昆虫食文化の変容過程を明らかにした。アンケート調査や聞き取り調査では、高齢者を中心とした昆虫食経験者が多数見られたが、現在は食べなくなったという回答が多かった。要因としては、農薬の使用などによる昆虫の個体数の減少と、住民の生活様式や食生活の変化が挙げられる。昆虫食文化は、採集行動に重きを置くマイナーサブシステム（遊び仕事）的な要素があり、スーパーマーケットなどで購入できるようになった既製の昆虫食品はその完全な代替とはならなかった。さらに、採集文化は親から子供、あるいは年上の子供から年下の子供への継承によって伝えられてきたが、生活様式の変化とともに子供の余暇活動が多様化し、採集文化が継承されなくなったことで、現在では一部の大人の愛好家が採集を行うに留まり、昆虫食文化は希薄なものとなっていた。

キーワード：昆虫食，食文化，マイナーサブシステム，大町市

I はじめに

I-1 研究の背景

昆虫は太古の時代から幅広い生物に食べられてきた食料であり、人間もその恩恵にあずかってきたにもかかわらず、現代では昆虫（を食べること）が忌避されるようになり、食料としての消費は稀なものとなった。しかしながら、2013年のFAO(国連食料農業機関)による報告書(van Huis et al., 2013)の発表以降は、家畜の飼料や食料としての価値が言及され、先進的な食材として新たに製品が販売されるようになった。それによって、昆虫食の愛好家の活動や製品、レストランがサブカルチャーの一つとして取り上げられ、それに付随して日本の中部地方に残存する昆虫食文化が伝統的な食文化の再発見のような形で注目を受けるようになった(太田, 2015)。しかし、依然として大多数の持つ、「昆虫自体が気持ちの悪いものであり食品ではない¹⁾」という意見は強く、新たな食品として一般に普及させることは困難なもの

なっている。

伝統的な文化としての昆虫食は、野中(1989)や三橋淳(2012)のように、どの地域でどの種類が食べられているか(あるいは食べられていたか)という分布に着目したもののほか、小林(2020)や浦山(2020)のように、ある地域でどのような食文化・習慣が存在するかという歴史的事実や、食文化が衰退してしまった過程を記述したものが散見される。これらの研究では、衰退の要因として人口の高齢化や食生活の変化などが繰り返し論じられてきたが、食文化の継承や食文化の基底にある採集行動についての議論は十分に行われてこなかった。

一方で、文化の継承については文化人類学において多くの研究が行われている。例えば、知識や技術の伝達の方法としては、幼少期では親から子供への「垂直伝達」が顕著であり、10歳手前から年齢の近い友達からの「水平伝達」や歳上の非親族からの「斜め伝達」の影響が大きくなるということが明らかとなっている(Setalaphruk and

Price, 2007; Hewlett et al., 2011; Gallois et al., 2018). また、松井 (1998) が定義した「マイナーサブシステム²⁾」に準ずる活動が娯楽や生活の補助産業として生まれ、それらは主に水平・斜め伝達によって継承されてきたことを複数の研究が明らかにしている (金城, 2013; 佐々井・中村, 2016; 高田・倉本, 2022). これら他領域の研究は、地理学における昆虫食文化研究に新たな分析の視角をもたらすと考える。

そこで本研究では、これまで地理学において重視されてきた観点だけでなく文化の継承やそのメカニズムといった観点にも着目し、昆虫食文化が現在にかけて希薄化していった過程について明らかにすることを目的とする。対象地域は、北安曇地方の中心であり松本平北辺地域に位置する長野県大町市とした。この地域はハチ食の文化的周縁に位置するとされるものの (野中, 1989), 現在、昆虫食品を生産するメーカーが近隣にない。また、これまでの研究の中心であり、現在でも比較的昆虫食文化が盛んであるとされる同じ長野県の南信地域や岐阜県の東濃地域と異なり、地域として昆虫食をアピールしていない。一方で、隣接する池田町には北安曇地方で唯一戦後も操業していた高姫社の製糸工場 (1995年に操業停止) があったため、養蚕業衰退後もカイコを入手することが比較的容易であったと推察される。また、大町地蜂愛好会が南信地域の伊那市の地蜂愛好会発足からまもない2000年に結成され、2000年代後半から2010年代にかけては「地蜂せんべい」という製品を製造・販売していたなど、既往研究で指摘される食生活の多様化や生息数の減少だけでは説明できないと考えられ、研究対象地域に適している。

本研究では半構造化インタビューとアンケート調査を行った。半構造化インタビューでは、喫食経験や昆虫食文化への意見のほか、昆虫採集行動のより詳細な情報を得るため、大町市および隣接する松川村の農家・元農家7名と非農家の昆虫食経験者4名の合計11名に聞き取りを行った。さらに、対象地域および長野県の昆虫食品業界についての概要を捉えるため、長野県内にある4社の昆

虫食品関連企業にも聞き取りを行った。

アンケート調査は大町市内の隣接する五つの地区 (北原町・幸町・桜田町・十日町・南原町) (第1図c) で合計499件配布し110件の回答が得られた (回収率22%, 有効回答数103件)。5地区を選定した理由は、農地と集合住宅が共にみられ、幅広い年齢層や職種からの回答が期待できたためである。しかし実際には、回収された調査票は50代以下の回答が少なく、20代は1件のみであった。対象地域での高齢化の影響が想定されるほか、集合住宅からの回答が特に少なかったこと、戸建住宅では複数世帯での居住が一般的であり、回答者が昆虫食に馴染みのある年長者に偏ることで年齢層が上がってしまったことが原因として推察され、これらが回収結果に影響を与えたと考えられる。調査票は2024年5月27日から31日に各世帯の郵便受けに投函し、料金後納郵便によって7月末まで回収を行った。内容は基本属性のほか、昆虫の喫食経験や昆虫食文化への意識に関する選択・記述式の質問である。

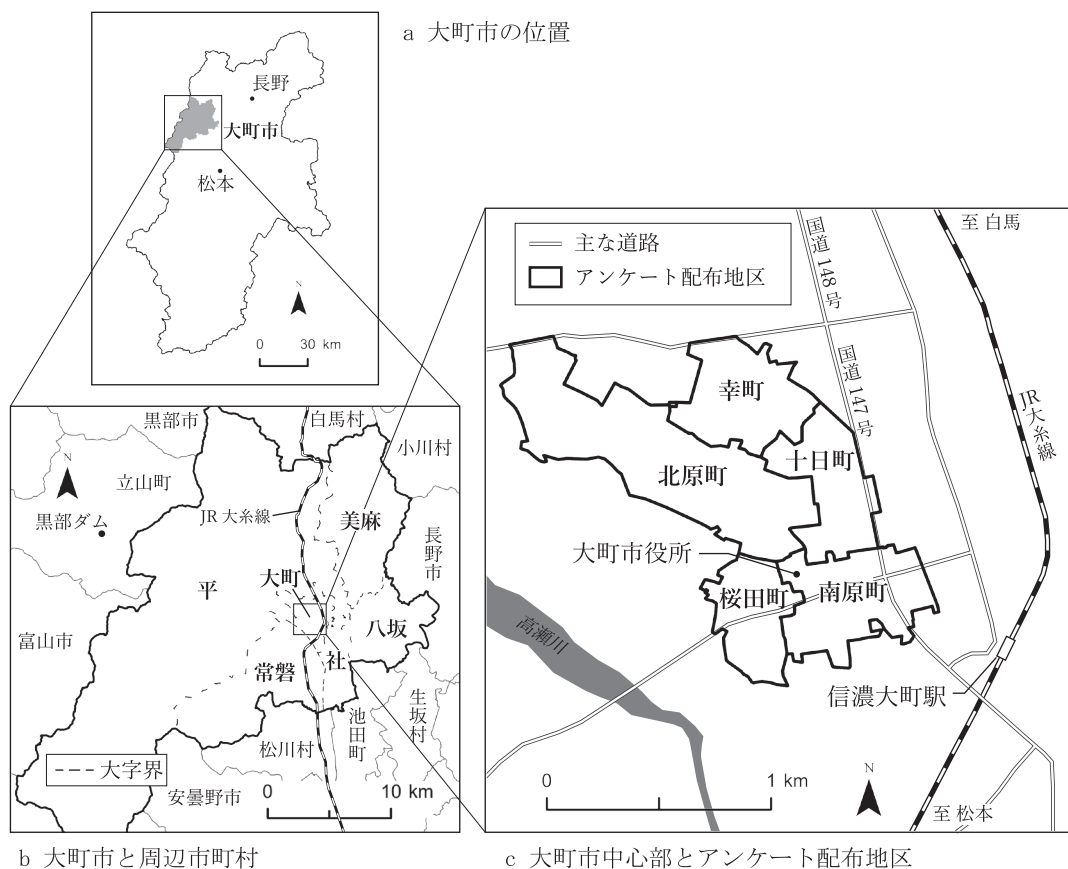
なお、本稿では、昆虫食は昆虫を喫食する行為のみを指し、昆虫食文化は喫食のほか、採集行動や売買などを含む文化全体を指すものとする。

本稿は四つの章で構成される。IIでは対象地域における昆虫食文化の概況をアンケートから分析する。IIIでは食文化が変容してきた過程とその要因についてアンケートの自由記述や聞き取り調査から論ずる。IVでは、大町市において昆虫食文化が継承されてこなかった要因をそれぞれの時代背景を基に考察する。Vでは、本稿のまとめを行う。

I-2 対象地域の概要

本研究の対象地域である大町市は、長野県北西部の松本盆地北端に位置する (第1図a)。北は仁科三湖を挟んで白馬村と、東は1000 m級の山々を境に小川村・長野市・生坂村と、南は松本盆地の池田町・松川村・安曇野市・松本市と隣接する。西は、急峻な北アルプスの山脈を隔てて富山県と接している。

大町市は、1954年に北安曇郡大町・平村・常盤



第1図 研究対象地域

村・社村の4町村が合併して誕生した。2006年には、東部の山間部に位置する美麻村・八坂村を編入した。現在の大町市はそれぞれの旧町村の名を冠した六つの大字に分けられており、市役所やJR大糸線信濃大町駅が位置する大町地区が市の政治的・経済的な中心となっている（第1図b）。

大町市は1956年からの黒部ダム建設に際して長野県側の基地となり、大町地区を中心に都市化が進んだ。建設の完了後は、立山黒部アルペンルート of 東側の玄関口として観光業が興隆した。現在でも大町地区は市内でも都市化が進んだ地域となっており、特に国道147号線とJR大糸線に囲まれた区域には住宅・商店が密集している。また近年では、国道沿いを中心にロードサイド型の店舗が増加している。一方で、他の地区では都市的な土地利用は少なく、水田を中心に農村的な土地利

用が広がっており、市全体で見ると農業従事者の割合は8%程度となっており、全国（3%）と比較して、農業従事者が多い地域であるといえる³⁾。

II 現在の大町市の昆虫食文化

本章では大町市における昆虫食文化の現状を記す。アンケート調査で得られた回答は男性54名、女性49名とほぼ同数となっている。出身地についても県外や他市町村は少なく、ほとんどは大町市内であった（第1表）。

昆虫食経験に関する質問では、回答者のほとんど（103名中98名）はいずれかの昆虫を食べた経験を持っていた。全ての昆虫食経験者がイナゴの喫食経験があり、この地域で最も一般的な昆虫食材であった。ハチは50代以上の約9割で喫食経験

があったが、カイコは70代以上でも半数程度にとどまっている。また、個別の記述をみると、ハチ追いや家庭内養蚕の経験の有無が喫食経験に影響していることが伺える。

しかし、既製品がスーパーで買えるようになったにもかかわらず、多くの昆虫食経験者が現在では食べていない、もしくは食べている場合でも年に数回程度にとどまっており、食文化の衰退が進んでいることがわかる。

また、現在までの入手方法としては、自分自身や家族が採集したものや知り合いが採集したものを食べる人が多い。これは、昆虫食という食文化が、稲刈り時期の子供や高齢者の遊び仕事や、ハチ追いという子供の遊びの延長線上にあったためであると考えられる。ただし、製品購入も昆虫食経験者の3割程度が選択しており、昆虫食文化の維持に貢献している。

第1表 アンケート調査結果(1)

(基本属性・昆虫食経験)(単位:人)

設問	選択肢	年齢(代)						
		~30	40	50	60	70	80~	
基本属性	性別	男性	4	6	4	14	16	10
		女性	2	6	7	7	15	12
	出身地	大町市	2	8	5	17	27	14
		池田町	0	1	1	0	0	1
		白馬村	0	0	2	0	0	1
		その他県内	1	1	1	3	3	4
長野県外	長野県外	3	2	2	1	1	2	
	その他	0	0	1	2	2	0	
昆虫食経験に関する質問	昆虫食経験	はい	5	11	11	20	29	22
		いいえ	1	1	0	1	2	0
	食べたことのある昆虫	イナゴ	5	11	11	20	29	22
		ハチ	1	6	11	19	26	20
		カイコ	0	0	1	5	14	11
		その他	0	0	1	2	2	0
	昆虫の入手方法(複数選択)	自分で採集	2	7	8	12	22	20
		家族が採集	3	8	7	14	14	12
		知り合いから	0	4	9	13	8	6
		製品を購入	1	2	4	10	10	5
その他		1	0	0	0	0	0	
現在		週に1回~	0	0	0	0	0	1
現在の喫食頻度	月に1回~	0	0	0	1	1	0	
	半年に1回	0	1	0	1	4	3	
	年に1回	0	1	1	0	4	3	
	数年に1回	1	4	3	8	3	5	
	食べない	4	5	7	10	17	9	

昆虫食文化への意識に関する質問(第2表)では、昆虫食を自身の文化であると捉えている回答者は80代以上を除くとそれぞれの年代で半数以下となっているが、逆に、半数以上が地域の文化ではあると考えていた。これは、「長野県には昆虫食文化がある」という一般的なイメージに影響されたためと思われる。昆虫を食べることへの抵抗感や昆虫自体への嫌悪感は70代以上の高齢者よりも40~50代の比較的若い世代で強く、Fukano and Soga (2021) の指摘する年齢と昆虫嫌悪の関係を表付ける結果となっている。また、年代が上がるにつれて昆虫を食べることに懐かしさを感じると回答する人が増え、伝統として維持すべきであると考えていた。

第2表 アンケート調査結果(2)

(昆虫食文化への意識)(単位:人)

設問	選択肢	年齢(代)					
		~30	40	50	60	70	80~
昆虫食は自分の文化である	A	1	0	0	2	2	6
	B	0	4	3	5	8	10
	C	0	1	1	7	9	3
	D	5	7	7	7	12	3
昆虫食は地域の文化である	A	1	2	2	3	7	9
	B	3	5	5	13	14	9
	C	1	0	2	3	7	3
	D	1	5	2	2	3	1
昆虫を食べることに抵抗がある	A	2	5	5	3	4	0
	B	3	6	1	10	9	8
	C	0	1	3	6	11	5
	D	1	0	2	2	7	9
昆虫は気持ちが悪い	A	2	5	3	4	3	1
	B	2	4	2	6	8	4
	C	0	1	4	8	12	6
	D	2	2	2	3	8	11
昆虫を食べると懐かしくなる	A	1	3	2	4	11	10
	B	0	5	5	9	12	10
	C	1	1	1	1	5	2
	D	4	3	3	7	3	0
昆虫食という伝統を維持すべきである	A	1	2	0	2	8	6
	B	0	3	2	9	13	8
	C	3	2	7	8	8	5
	D	2	5	2	2	2	3

注) A:とてもそう思う
B:ややそう思う
C:あまりそう思わない
D:そう思わない

このように、昆虫への抵抗が薄く、喫食経験も多い高齢の世代ほど昆虫を食材として肯定的に受け入れており、文化として維持されることを望んでいた。一方で、比較的若い年代では昆虫への忌避感が強く、過去の文化として自身の習慣とは切り離して捉える傾向にあり、昆虫食文化が継承されない理由の一つになっている。

Ⅲ 大町市周辺における昆虫食文化の変化

本章では、アンケート調査の自由回答、および聞き取り調査で得られた内容を基に昆虫食文化が変化した要因について議論する。なお、ここでの「昆虫食」とは、広く食べられてきたイナゴ・ハチ・カイコの喫食に限定する。現在に至るまでに昆虫食文化に変化を与えた要因は第3表で挙げるものに分類できた。以下ではそれぞれの要因について詳らかにする。

Ⅲ-1 3種に共通する要因

1) 戦時下の食料不足

戦時下の食料難では昆虫を食べることが推奨されていたことで、平時よりも幅広い種類の昆虫⁴⁾がより多量に食べられた。そうした状況のため、それまでは食べてこなかった人々も昆虫を口にすることなり、一時的に食生活としてそれ以前より浸透した。当時、必要に駆られて食べた人々は戦後に食料難が解消されるとともに昆虫を食べなくなっていた。

2) 食生活の多様化

聞き取り調査では、昆虫を食べる習慣が薄れた理由として、5名が食生活の多様化をあげていた。対象地域においては黒部ダム建設(1956~1963年)に伴って多くの人が移住し、地域が活性化していく中で物質的に豊かな時代を迎えたことで食生活も豊かになった。物流が発達し、大型スーパーマーケットが多数進出するなど、購買による食料品の入手手段が発達したことで昆虫を自家採集する必要性が低下し、さらに、多くの食の選択肢が生ま

第3表 昆虫食文化に変化を与えた要因

種類	文化への影響	要因	主な回答事例
共通	+	戦時下の食料不足	戦争中の食料難で食べさせられた 戦争中は食べるものが少なかったので親に採りに行かされた
		食生活の多様化	食生活の変化 他の食べものが沢山あるのにわざわざ食べたくない 貧しい時代の食べ物だからもう食べたくない
イナゴ	+	既製品の流通の一般化	懐かしくなってきたに買う 大北地域では小さな商店より旅館に卸していた 2000年過ぎから製品をスーパーの流通網に流した
		農業による生息数の減少	農業散布によってイナゴがいなくなった
イナゴ	-	農業の機械化による接触機会減少	稲刈りをしなくなってから採らなくなった 機械を導入してから見かけなくなった
		生息数の減少	畦道が減って近くで採れなくなった 巢の多い場所が切り開かれ見つけられなくなった
ハチ	-	子供の余暇活動の変化	放課後も塾や習い事に行く子供が増えた ハチ追いは他の遊びとの競争に負けた
		大町地蜂愛好会の活動	組織を立ち上げたことで知識や技術の交換が盛んになった 地蜂せんべいはよく売れた
カイコ	-	地蜂愛好家の減少	若年層の流入がないまま愛好家の中心世代が高齢で引退した 各々が趣味で行っているため新規参加者を歓迎できず後身の育成ができなかった
		養蚕・製糸業の衰退(家庭・工場)	カイコは家庭で養蚕を行っていた時代の食べ物 製糸業の衰退とともに見かけなくなった

(アンケート・聞き取り調査より作成)

れたことで昆虫の食品としての価値も相対的に低下した。アンケート調査でも、他に美味しいものが沢山ある以上、昆虫を食べたいとは思わないという意見が33件と多く、影響の大きさが伺える。特にカイコは味が良くないという評価も見受けられ、最も影響を受けていると思われる。

3) 既製品の流通の一般化

対象地域で既製の昆虫食品の流通が広くみられるようになったのは2000年以降と考えられる。その理由は、地域内で確認できた製品の多くが1990年代以降に製造を開始し⁵⁾、その他の製品につい

では第3表にもあるように、旅館を除くと製造元がスーパーやスーパーに卸す食品商社に販売を行うようになったのが2000年以降だからである。それ以前には、池田町にあった高姫社から近隣の商店に卸されたカイコの蛹以外に、経済活動を通じた入手はほぼ無かったと考えられる。

Ⅲ-2 イナゴ食文化の変化の要因

1) 農業による生息数の減少

生息数の減少については1950年代に始まった水田への農業の空中散布以降、現在まで続いている。その影響を受け、趣味として成人後もイナゴ採り⁶⁾を行っていた人々も、採集量が減少したことで、自家消費や近隣へのお裾分けが困難になった。そのため、地域全体で消費量とイナゴへの接触機会が減少し、文化に負の影響を与えた。

長野県内の昆虫食品製造会社では、農業散布が浸透して以降年々収穫量が減少し、長野県産だけでは原材料が足りなくなったため、県外のイナゴも仕入れるようになった。さらに、1990年頃からは輸入品のイナゴも利用するようになったことから、全国的に生息数が減少してきたと考えられる。

一方、昭和の末に毒性の弱い農業に変わり生息数が微増したという指摘や（鈴木、2020）、聞き取り調査でも近年の農業の進化に伴って環境負荷が軽減されたことでイナゴ以外の生物も含めて微増しているという意見があったことから、主に1950年代から1980年代までの期間に、農業が昆虫食文化の継承に負の影響を与えたと推察される。

2) 農業の機械化による接触機会の減少

農業の機械化による接触機会の減少とは、1950年代から始まった農業機械の導入による農作業の変化の影響によるものを指す。

イナゴ採りは、秋のコメの収穫時に大人たちの刈入れ仕事の役に立てない子供や高齢者に割り当てられた仕事（子供にとっては遊び）という側面が強かった。そのため、機械が導入され自動化が浸透していくと刈入れ仕事も機械化して徐々にイナゴに接触し採集する機会が失われていった。イ

ナゴに接する主な機会を失ったことで、家庭で食べる頻度は減少し、機械化が定着するにつれてイナゴ採りの経験を持たない世代が増えていった。さらには、接触機会の減少がイナゴへの抵抗感を高めることになった。

Ⅲ-3 ハチ食文化の変化の要因

1) 生息数の減少

ハチの生息数減少は農業による影響、山林の切り開きによる影響を受けている。イナゴ同様に農業による影響は大きく、対象地域のハチ食は偶発的に発見したハチの巣を採集するケースが多いため、生活空間である田畑の畔に巣が作られにくくなり生息数が減少することは徐々に喫食頻度の減少を招いた。また、ハチ追い⁷⁾を行う場所となる山林が工場建設などで切り開かれたことで、生息数が減少したことで結果として、ハチ追いという遊びも衰退させることとなった。

2) 子供の余暇活動の変化

子供の遊びの変化や放課後の過ごし方といった学外での活動が変化したことも、ハチ食文化に負の影響となった。ハチ食もイナゴ食同様に採集行動の延長に喫食があり、ハチ食の場合、それは偶発的な巣の採集とハチ追いである。

ハチ追いは主に10歳前後で同年代や少し上の年齢の友人に付き添うことで遊びを継承し、15歳頃にこの遊びを卒業する。この継承は親子間で行われる場合は珍しく、水平・斜め継承がほとんどとなっている。しかし、次第に子供たちが放課後や休日に塾や習い事に行くようになり、さらにはテレビゲームなどの新しい娯楽が出現したことで、ハチ追いが余暇時間の活動として行われなくなっていった。その結果、子供の間での遊びの継承が途絶え、付随してハチ食文化も継承されなくなっていった。

3) 大町地蜂愛好会の活動

2000年に設立された大町地蜂愛好会は、大町市を中心に、近隣の地蜂愛好家のコミュニティとし

て機能し、飼育・採集技術の交換の場となった。さらには、採集の協力者を集められる集会所としても機能していた。愛好会の会員が採集した地蜂を使用した「地蜂せんべい」の販売⁸⁾や全国地蜂サミット（現：串原へぼまつり）への参加は地域の地蜂文化の継承に貢献していた。しかし、愛好会設立後も、ハチ追いの衰退を解消することができずに団体は縮小期を迎えている。

4) 地蜂愛好家の減少

前項での指摘及び、野中（2023）での言及の通り、1980年代にはハチ追いの遊びは継承が途絶えており、中年・高齢者趣味として採集の主流になっていた。その後も若年層の流入がないまま現在までに多くの愛好家が引退している。大町地蜂愛好会も多くの会員が採集・飼育活動から引退したことで、2010年代後半から年々団体としての活動が縮小している。大町地蜂愛好会は、既存の愛好家のサークルであり、文化の継承を積極的に行うことを第一義的な目的とした団体ではないため、新規参加者にテリトリー（特定の地区内の巣の採集の優先権）を分け与えるような保護・育成策を行えなかった。こうして、愛好家の減少と技術・文化の継承の途絶に繋がり、ハチ食文化にも負の影響となった。

Ⅲ-4 カイコ食文化の変化の要因

カイコ食はカイコという昆虫の性質上、養蚕・製糸業と関連していた。そのため昭和恐慌以降、製糸業の衰退が始まり、家庭内養蚕も次第に行われなくなるにつれ徐々に喫食機会が減少していった⁹⁾。高姫社が操業していた時期（1995年まで）は工場の近隣でカイコの蛹が販売されていたが限定的なものであった。カイコの喫食経験者は60代以上の高齢者にそのほとんどに限られることから、1970年頃には食文化は変化していたと推察される。また、先に論じた2種と異なり味が独特なカイコを苦手にする人も多く、食生活の多様化の影響を特に強く受けたと考えられる。

IV 考察

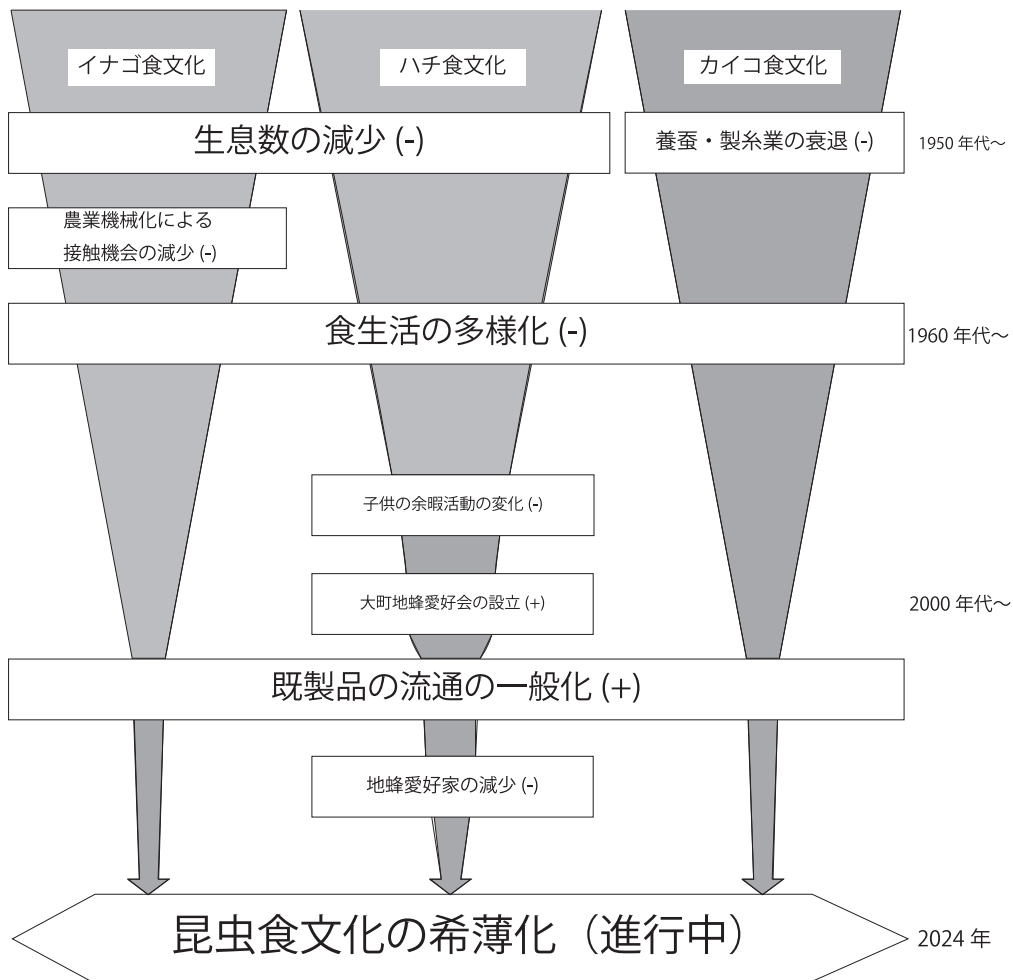
昆虫食文化はそれぞれ特有の要因の影響を受けて変化していた。イナゴ食文化は、生息数減少によって趣味的採集が衰退したこと、それに伴って採集後の自家消費・頒布による消費が減少したこと、機械化によってイナゴ採りという遊び仕事の継承が断絶したこと、食生活が多様化して他の食品との競争に負けたことといった複数の負の要因を受けていた。

ハチ食文化は、生息数の減少やハチ追い継承の途絶、愛好家減少の影響、食生活の多様化の影響といった複数の負の影響を受けていた。特に、ハチ追いについては遊びの継承が子供の余暇活動の多様化によって他の活動に取って代わられたことで途絶えたことが明らかとなった。地蜂愛好会の設立は地域内外の愛好家間の技術や情報の共有の場となったものの、若年層の育成という問題を解消できずハチ食文化を再生させることはできなかった。

カイコ食文化は、養蚕業の衰退と食生活の多様化の影響を受けていた。

そして、これら3種の昆虫食文化の継承が途切れた頃ようやく製品が流通するようになったため、昆虫食文化を習慣として内面化している高齢層の喫食を継続することにのみ貢献していた。

以上から昆虫食文化はさまざまな事象の影響を受けて、「希薄化」してきていることが明らかとなった（第2図）。聞き取り調査やアンケート調査にて、「買ってまで食べるものではない」、「今でもコンバインに乗りながらイナゴを採集する」、「ハチは美味しかった」、「採集は面白かった」などと回答する採集を前提とした本来の昆虫食文化の記憶や経験を持ち、それらにノスタルジーを抱く人々がまだ多く存在し、昆虫食品の流通量も以前より増加している現在は、衰退よりも復調の可能性を含意する「希薄化」と表現する方が正確である。こうした人々が記憶や経験を継承できぬままいなくなり、製品の流通量も減少するようになった時に、衰退と表現できるようになると考える。



第2図 昆虫食文化希薄化の過程

注：矢印の太さは文化の盛衰を表す。

（アンケート・聞き取り調査より作成）

V おわりに

本稿は、かつては昆虫食が盛んであったが現在ではあまり盛んではない地域を対象に、聞き取り調査・アンケート調査を通じて、昆虫食文化がどのように受け継がれ、どのような要因によって希薄化してきたか、その過程について検討した。

第一に、昆虫喫食自体は世代を問わずほぼ全ての人を経験しているものの、喫食経験が多く昆虫への抵抗が少ない高齢世代ほど食材として受容しており、文化として維持されることを望む一方で、

若年層は昆虫への忌避感が強く、過去の文化として自身の習慣とは切り離して捉える傾向にあることを明らかにした。

第二に、昆虫食文化は生息数の減少や食生活の多様化など様々な事象の影響を受けて、「希薄化」してきたことを明らかにした。戦後高度成長期より前のイナゴ・ハチ食文化は、農業の労働力として不十分な子供たちが、親族や友人から採集技術を継承し、遊びや、子供でもできる労働として採集を行い¹⁰⁾、その結果として得られた昆虫を食すという文化であり、昆虫食文化といわれるものの、

実際には採集行動を中心としたマイナーサブシステムの要素が強い文化のため、食慣行は付随的な位置付けであった。しかし、次第に採集行動の継承が途絶えるようになっていったことで、食慣行のみが残った結果、自家採集を行わず昆虫に忌避感を覚える若い世代と、昆虫に忌避感はないものの自身で採集を行えなくなった高齢世代の二極構造となり、既製品の流通や「地蜂せんべい」の販売という文化にとってポジティブな事象も効果をあげられず、文化の「希薄化」が進んでいった。カイコ食文化については、養蚕業の副産物であるカイコの蛹を食す文化であったため、産業の衰退により食材の入手が困難になると、接触・喫食の機会が減少し、それによってイナゴ・ハチ食同様に忌避される存在となったことで、カイコ食文化「希薄化」していった。

日々の生活の営みから振り落とされ「希薄化」が進む昆虫食文化は、前提となる自家採集がほぼ消滅したことで、現代的な流通システムの中で、昆虫食品を食べるといった文化へ形態を変化させつ

つある。郷土教育的な取り組みとして食べる機会が設けられるほか、長野県内の昆虫食品企業の中には伝統的な佃煮だけでなく、新たな味付けの模索や全く異なる製品の開発を行なっている企業も現れており、時勢となりつつある。文化の形態を変化させてでも維持するという方向性は一つの方法であることは確かであるが、製品を購入して食すだけの行為を文化とは言い難い。昆虫食文化の維持・復活のため、採集行動や家庭内飼育に付加価値を再び与えることこそ、取り組まなければならない課題なのである。

本研究ではアンケート・聞き取り調査を行ったが、ともに若年層の調査結果が十分に得られなかった。また、昆虫食品を取り扱うスーパーや、過去に地域に多く見られた商店への調査が行えず、流通面からは十分に議論が行えなかった。さらに、セミやカミキリムシのようなごく少数の喫食経験者がいるような事例についても十分な調査ができなかった。これらは今後の研究の課題としたい。

本研究の調査においては、大町地蜂愛好会会員の越山秀雄様、大町市役所農林水産課および市民活動サポートセンターの皆様、松川村「すずの音ホール」職員の皆様、長野県内の昆虫食品製造会社の皆様、アンケート配布地域の自治会長様や住民の皆様、聞き取り調査に応じてくださった皆様など多くの方々からご協力を賜りました。また、執筆にあたっては、山下亜紀郎先生を始めとする筑波大学生命環境系の先生方、および院生諸氏にご助言いただきました。記して感謝申し上げます。本稿では、アンケート結果の集計を加藤・澤木・曹・孫・高見澤が、I-2の執筆を市川が、第1図の作成を加藤が、その他の執筆は浅子がそれぞれ担当し、全体の調整を浅子・加藤・澤木が行った。

[注]

- 1) Fukano and Soga (2021) は、現代人が昆虫を忌避する理由として、人間の根底にある病原体を避ける心理的な作用が都市化による自然一般への知識の低下によって強化され、昆虫への嫌悪を増大させていることを示唆しており、この心理的な働きが昆虫を食べることに影響を与えていると考えられる。
- 2) マイナーサブシステムとは、主要生業に対して経済的な意味合いが弱く、娯乐的な要素が大きい生業のことであり(松井, 1998)、「遊び仕事」とも称される(三橋俊雄, 2012)。
- 3) 総務省統計局「国勢調査(2020年)」より。
- 4) 一例として、イナゴ、ハチ、カイコ以外にも、オケラ、ゲンゴロウ、カミキリムシ、コオロギなどの昆虫を食べていたという証言が聞き取り調査によって得られた。
- 5) 市内で販売されている昆虫食品の製造元企業のホームページより確認できた。
- 6) イナゴ採りの手法など具体的な内容については野中(2008)を参照されたい。
- 7) ハチ追いは飛行するハチを目視で追跡し、主に山林や田畑の畔に造られる巣を採集する遊びである。

具体的な手法については野中（2008）を参照されたい。

- 8) 「地蜂せんべい」は2017年頃に販売が中止された。その理由としては、これまでのせんべいの製造委託先が廃業し、新たに探す必要があったが、昆虫を使用することが委託候補企業に抵抗感を覚えさせたことがハードルとなったこと、また、せんべい用の原料として地蜂を採集する義務が、趣味として行う会員たちの負担となっていたことが挙げられる。
- 9) 1959年の統計では市内の桑園面積は952反（=94.4 ha）であったが、1969年では41.2 ha、1979年では4.9 haと急減しており、養蚕業の急激な衰退が伺える（長野県蚕糸課編『長野県蚕糸業統計』昭和34、44、54年度より）。
- 10) 一部の大人は採集の面白さや昆虫の味の良さに惹かれ、大人になっても趣味として継続して行っていることが調査によって明らかとなった。

【文 献】

- 浦山佳恵（2020）：伊那谷における蜂の子食慣行のいま—伊那市を事例に一。長野県民俗の会会報，**43**，183-200。
- 太田 寛（2015）：信州の昆虫食が世界を救う。田下昌志・丸山 潔・福本匡志・横山裕之・保科千丈著『信州人 虫を食べる』信濃毎日新聞社，3-16。
- 金城達也（2013）：生活活動の組み合わせとコモングの役割—徳之島におけるソテツ利用を焦点に一。北海道大学大学院文学研究科研究論集，**13**，569-582。
- 小林直樹（2020）：長野県伊那市における昆虫食の実態と多様性。E-journal GEO，**15**，332-351。
- 佐々井飛矢文・中村仁美（2016）：丹後地方の食生活にみられる共同体の意識—袖志地区の磯漁における「おかずとり」—。日本家政学会誌，**67**，597-609。
- 鈴木秋彦（2020）：新潟県の昆虫食文化。高志路，**416**，1-12。
- 高田 陽・倉本 宣（2022）：長崎県対馬でのニホンミツバチ伝統養蜂における在来知とその知識継承。明治大学農学部研究報告，**72**，1-10。
- 野中健一（1989）：中部地方におけるクロスズメバチ食慣行とその地域差。人文地理，**41**，82-96。
- 野中健一（2008）：『昆虫食先進国ニッポン』亜紀書房。
- 野中健一（2023）：昆虫食に地域性と在来知識を探る。歴史地理学，**65**，5-14。
- 松井 健（1998）：マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体。篠原徹編『現代民俗学の視点1 民族の技術』朝倉書店，247-268。
- 三橋 淳（2012）：『昆虫食文化事典』八坂書房。
- 三橋俊雄（2012）：遊び仕事を通したSubsistenceの再考。デザイン学研究特集号，**20**，28-33。
- Fukano, Y. and Soga, M. (2021) : Why do so many modern people hate insects? The urbanization-disgust hypothesis. *Science of the Total Environment*, **777**, 146229.
- Gallois, S., Lubbers, M.J., Hewlett B. and Reyes-García, V. (2018) : Social networks and knowledge transmission strategies among Baka children, Southeastern Cameroon. *Human Nature*, **29**, 442-463.
- Hewlett, B.S., Fouts, H.N., Boyette, A.H. and Hewlett, B.L. (2011) : Social learning among Congo Basin hunter-gatherers. *The Royal Society*, **366**, 1168-1178.
- van Huis, A., Van Itterbeeck, J., Klunder, H., Mertens, E., Halloran, A., Muir, G. and Vantomme, P. (2013) : Edible insects: Future prospects for food and feed security. *FAO Forestry Paper*, 171.
- Setalaphruk, C. and Price, L.L. (2007) : Children's traditional ecological knowledge of wild food resources: A case study in a rural village in northeast Thailand. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, **3**(33), 1-11.